Vol.3
2011.11

漢検生涯学習ネットワーク 会員通信

● 第2回研修会開催報告 …… 1
● 初めて一級に合格しました! … 3
● 特集 漢検で培った漢字の知識を活かしています。… 4
● コラム 漢字教育士養成について … 7
● お知らせ 投稿募集 …… 8

第2回 会員向け研修会 開催報告

9月23日(金・祝)に名古屋市のウインクあいちにおいて、第2回会員向けの研修会を開催し、中学生から80代の会員94名の参加がありました。武庫川女子大学の佐竹秀雄教授による講演と会員による研究発表を行い、参加された皆様からはいずれも好評でした。

講演の部 要旨

図表で見る漢字と語彙の世界

武庫川女子大学文学部教授 同言語文化研究所所長
佐竹秀雄先生

私は現職に就く前、国立国語研究所に在籍していました。国立国語研究所は、日本の言葉に関する興味深い研究を多数おこなってきました。本日はこれらの研究(図表)から見える漢字や語彙の世界をご紹介します。

日本語の語彙は50万語以上あると考えられますが、歴史的にどのような変化があったのかについて、ユニークな研究があります。

宮島達夫(1967)は、1956年に発行された雑誌での語彙調査で上位1000語のうち、昔の文献の中で何語現れたかをグラフにしました。すると、8世紀末の『万葉集』から1867年のヘボン『和英語林集成』までは見事に時代に比例して増えていますが、1867年から1909年発行の『和英辞典』までの期間で突然その比率が大きくなって、数が急増していることがわかります。これは、明治時代の文明開化によって様々なモノや文化が流入し、日本人が使用する語彙に大きな変化が生じたためです。

また、明治期から昭和にかけての新聞における語彙調査によると、和語が減少し、漢語が増えていることがわかります。これは、西洋文化の流入により、新しい概念の言葉を表すのに、日本人が「漢語」を用いたことによります。「郵便」「時間」「家庭」などはこの時代にできた言葉であり、この時代にできた漢語を、現代の私たちもよく使っています。

漢字使用の変遷についても過去に調査しています。安本美典(1963)は、1900年～1955年に発表された小説から文字を抽出し漢字含有率を調べたところ、漸減傾向が見られることから、将来いつ漢字が滅亡するかを算出し、最短で2031年と予測していました。

ところが、この発表から25年後、宮島達夫(1988)の検証により、1950年～1960年は、雑誌・小説の漢字含有率は漸減傾向だったものの、その後20世紀後半には漢字含有率が減っておらず、むしろ増えているものさえあったことがわかりました。理由としては、漢字使用を制限するためにおこなわれた戦後の漢字政策(当用漢字の制定など)が皮肉にも漢字の表記や使用を安定させたこと、また最近の傾向ではワープロ・パソコンの使用により、曖昧な記憶でも漢字を使用できるようになったことが考えられます。

さらに、漢字の画数と使用率の調査では、使用率順位ごとに平均画数をグラフ化すると、順位が上がると平均画数が少なくなることがわかりました。これは、私たちがよく使う漢字の画数を減らしてきたから(例えば「年齢」→「年令」、「○歳」→「○才」)で、筆記の経済法則に則っています。

講演の様子

このように、私たちがどのように漢字を使用するかによって、漢字をめぐる環境は変わってくるのです。つまり、その漢字や言葉が正しいのか正しくないかということも、私たちの言語感覚によって変わってくると言えます。ただ、最近はこの言語感覚自体に危機感を覚えることが多いのもまた事実です。

引用研究
● 宮島達夫(1967)「近代語彙の形成」、国立国語研究所論集3『ことばの研究3』
● 安本美典(1963)「漢字の将来」、『言語生活』137
● 宮島達夫(1988)「漢字の将来その後」、『言語生活』436

第❷回 会員向け研修会 開催報告

会員発表の部 要旨

『かきつばた』からの発想
―『物の名』から『人の名』へ―

丹羽 孝さん

伊勢物語の第九段「東下り」に、「からころも きつつなれにし つましあれば はるばるきぬる たびをしぞ思ふ」という歌が登場します。在原業平が東下りの道中、かきつばたが美しく咲いているのを見たある人から、「かきつばた」の文字を各句の上に据えて旅の心を詠んだ歌を作れ、といわれて作ったものです。即興で作ったとは信じられないくらいよく整っているため、自作できないかと作歌過程を考察しました。

「かきつばた」の文字を据えたことで、第五句目から四句目、三句目…と逆から順に作っていくことができたのではと考えました。一見すると歌の創造を制約しそうな折句の条件が、実は作歌のヒントになり、物語のように即興で作ることができるのです。さらに「古今集 巻十 物名」の世界を覗き、物の名や人の名を使って、折句や沓冠の作歌もしました。これらの作歌が可能なのは、日本語には適度な冗長さがあり、多様な表現が可能であるためだと実感しました。古くから歌には功徳があるといわれてきました。言霊の世界は実際にあると感じます。皆さんにもぜひ「人の名」の折句に挑戦していただきたいです。

漢字から発生したひらがなの歴史と今日的な問題

野口真康さん

古代、日本には文字がありませんでした。奈良時代の万葉集では漢字を音にあてた「万葉がな」が用いられています。ひらがなは平安時代に漢字から生まれたものですが、その書体は時代と共に変化しています。平安朝に書かれた歌集の文字は、「御家流」と呼ばれ、江戸時代の公文書にも使われた文字を比較すると、平安時代の書体は非常に繊細で美しいのに対し、江戸時代のものは太くしっかりとしています。商売の縁起かつぎから「かすれない・先細りしない、枠いっぱいに書く、極端にはねる、長くつなげる」などの特徴があり、数字をつなげて書くのは改竄防止の意味もありました。全国で同じ書体を学ばせたことから日本人の識字率向上にも役立ちました。現在でも蕎麦屋や歌舞伎などの看板で目にします。

明治時代から、漢字は楷書で、ひらがなは単体で書くことを教科書で教えるようになり、平安時代の上代がなが復古しました。

現代では、ひらがなをつぶしたような「丸文字」を書く人が増えましたが、これは元々縦書きで美しく書けるように作られたひらがなを、横書きでも読みやすくするために、横のラインをそろえて書いたためです。

時代と共に変化したかな文字の書体。そこには使い手の生活や文化が関わっているのです。

「第3回会員向け研修会」は「漢字文化シンポジウム」in京都

このたび、京都大学と財団法人日本漢字能力検定協会は、AEARU（東アジア研究型大学協会）の協力のもと「第1回漢字文化シンポジウム」を開催することとなりました。

漢字文化圏に属する４つの国と地域（日本・中国・韓国・台湾）の主要大学が集まり、漢字をテーマにした国際シンポジウムを開催します。この画期的なプログラムを、漢検生涯学習ネットワークの皆様にも聴講いただきたいと考え、第3回研修会としてご案内することにしました。詳しくは同封のパンフレットをご覧ください。皆様からのお申し込みをお待ちしております。

※シンポジウムは、会員以外の方の聴講も可能です。

初めて一級に合格しました!

漢検の最高峰である一級に初めて合格した会員の喜びの声をご紹介します。

私は、準一級取得から十年余りの間、二十数回の挑戦の末、昨年六月にやっと一級に合格できました。その日をどんなに夢に見て来たことか、あの感激は一生忘れません。応援してくれた家族に恩返しができ、また今年の私の還暦が一層特別なものとなりました。

長い道のりでしたが、「雨垂れ石を穿つ」と信じて、協会発行の頼もしい漢字辞典と四字熟語辞典を基に、多種多様なまとめを只管にやって来ました。因みに、三十点も占める四字熟語は、種類別に整理し、噛み砕いて覚えました。私にはこのようなまとめが楽しく、とても充実した日々でした。試験の一ヶ月前になると、それらを参考に、山ほどの過去問・問題集を頭の中に叩き付けるように我武者羅に頑張りました。その間は非常に苦しい自分との戦いでした。試験は落胆の連続でしたが、おぼろげだった漢字がその度に浮き彫りになっていくのが分かり、いい勉強になりました。

これからは、浅くしかできなかった語源の知識を深め、苦心して覚えた漢字を忘れてしまわないように、時々一級を受けていきたいと思います。

最後に、漢検に巡り会えたことに感謝しています。

神奈川県　冨田さん

十年にわたる挑戦を続けていただいたことに、感謝の気持ちでいっぱいです。

平成二十三年六月の試験で一級に合格しました。六度目の挑戦でした。平成二十一年二月に二級、同六月に準一級を受検し、一級合格までに約二年を費やしました。一級のレベルの高さをひしひしと感じながら、受けても受けても失敗し撓けそうになった私を奮い立たせたのが今年三月の大震災でした。私も家が被災し恐い思いをしましたが、私よりも深刻な被害を受け悲惨な生活を余儀なくされている方々のことを考えると、「何を些細なことでクヨクヨしているんだ!合格出来ないのは己の未熟さ。合格できるまで勉強すればいい。」と考えるようになりました。震災後しばらくして、六月の試験勉強を必死にやりました。テキスト、問題集、過去問を隅から隅まで読み捲り、知らない漢字は紙に書き、覚えるまで繰り返し学習しました。この執念が今回の合格に繋がったと思います。

合格を知ったときは意外に平静でした。本来なら狂喜乱舞するところでしたが、郵便ポストに入っていた郵便物が大きかったので、「もしかして合格証書?」と思いながら開封したら、本当にそうでした。喜びが込み上げてきました。

今後の目標としては、漢字は勿論ですが、それを含む「日本語」というものを日本人として勉強していきたいと思います。

宮城県　沢田さん

大震災を乗り越えての初合格、本当におめでとうございます!

平成二十二年度第二回の検定にて、一級に一六七点で合格しました。二回目の挑戦でした。

二十一年度の第三回検定で初めて一級を受検し、わずか八十点と玉砕。準一級は一回目で合格しましたが、一級の壁の厚さを痛感、リベンジを誓いました。ただ、会社では残業や夜の会食も多く、家庭では家族サービスもあり当初思うように勉強の時間が取れませんでした。結果、自分に合った二つの勉強法を見つけました。

一、朝型にし、朝五時起床、五時半から七時まで勉強してから出勤。

二、学習した漢字や間違えた問題を全て単語帳に書き写して常に持ち歩き、通勤途中等で活用し、一週間の成果として週末にチェックテストを行い、覚えたものは単語帳から外していきました。単語帳は一冊百枚のものを結果四十冊消費しました。受検直前には一旦外した四千枚近いカードを再び取り出し、再確認テスト。うろ覚えのものは徹底的に洗い出し、復習しました。

自己採点がギリギリだったので、合格したときは正直ホッとしました!

漢検で勉強癖がつき、今は英語の資格の勉強をしています。こちらもある程度究めたら、また一級を受検して漢字の知識を分厚くしたいと思います。

東京都　坪田さん

お仕事などで忙しい中、学習方法の工夫で見事に合格を勝ち取られました!英語の勉強も頑張ってくださいね。

今回、多数の投稿をいただいたため、すべての原稿を掲載しきれませんでした。
皆様の原稿を拝見して、一級への道は、受検者の数だけあるのだと感じました。
初合格を目指している方、合格された暁にはぜひ感動の声をお聞かせください。

特集「漢検で培った漢字の知識を活かしています。」

漢検一級・準一級合格に向けて学習する際、さまざまな漢字の知識を身につけてこられたと思います。その学習範囲は、表外漢字から旧字体、難しい故事成語まで…。ともすると「マニアック」で「日常生活では役立ちにくい」知識と思われがちです。

そこで、今回は会員の皆様に「こんな場面で漢字の知識が役立った」という投稿をいただきました。その中のいくつかをご紹介したいと思います。

投稿❶

私は高校の国語の教員をしています。

古文の入門で必ずといっていいほど教科書に出てくる『竹取物語』。その冒頭は、「今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹をとりつつ、よろづのことに使ひけり」

竹取の翁は、竹細工師です。「よろづのこと」ってあるけど、竹を使ってできるものは何？

――生徒の答えは、「竹とんぼ」「流しそうめん」…!? せいぜい「ざる」「かご」がいいところ。竹製品といっても、案外思いつかないものです。そこで――、

「竹かんむりの漢字を調べろ」

竿、笊、笞、笛、笠、簪、筒、筆、筏、箱、筵、管、簑、箕、篩、箍、箒、箸、篦、籤、簾、籠、篩…。

「ほうら、たいていの日用品は竹で作れるだろ」

漢検一級学習の成果で、授業の幅が広がります。

（宮城県　佐竹さん）

投稿❷

青春時代に三年間フランスに留学しました。海外生活が長くなると少しずつ日本語を忘れます。帰国して翻訳の仕事を始めたものの、原文の理解にも増して、的確に表現する日本語の語彙不足に長年苦しみました。思い切って漢検に挑戦し、一級合格までに一年半かかりました。漢検に取り組む中で漢字の語源や故事来歴、漢文の修辞法まで学び、日本語の言語体系を整理することができました。翻訳は記号としての言葉の置き換えではなく、異なる思想体系や異文化に橋を架ける難事業です。東と西の違いや共通点を見極めて融和させなければなりません。それでも時おり言葉の奥に凝縮された神髄に触れたとき、不意に言霊が訪れて耳元で囁いてくれるように。例えば What a stroke of luck という原文に出会ったとき「まさに渡りに舟とはこのことです」と訳出し、思わず会心の笑み。彫刻家が完成した像をイメージしながら、迷うことなく彫り進めるような喜びです。漢検との出会いが別の世界の扉を開き、時空を超えた言葉たちとの和やかな交流が今も続いています。

（東京都　高橋さん）

この他にも、「ボランティアでジュニアサッカーのコーチをしています。子ども達に〈他人の技術をみて、真似をすることの大切さ〉を伝える際に、「みる」という言葉は当てる漢字（「見る」「観る」「視る」等）によって意味が異なることを説明し、同じ『みる』でも『観る』(watch) はとりわけ注意深く、一心不乱に観ることを指し、真似するにはこれくらいの注意力・観察力が必要だと話すと、子どもたちは興味を持って聴いてくれます。」（大阪府　日浦さん）や、「結婚式のウェルカムグッズとして作った特大提灯に『嘉遇』や『肝胆相照らす』などの言葉を入れたところとても好評でした。また、子どもの名づけの際には旧字体を使いました。近年読み方が複雑な名前は多いですが、旧字体にこだわった名前というのは驚かれて感心されます。子ども達が成長したときに名前の由来を語るのが今から楽しみです。漢字に興味を持ってくれたら、親子で漢検一級を目指したいです。」（滋賀県　P.N. 千佳子ママさん）など、身近なエピソードもいただきました。

さてここで、漢検を通じて培った漢字の知識を活用し、地域の生涯学習の啓発に寄与している「北海道漢字同好会」の活動をご紹介します。

北海道漢字同好会では、毎年多くの団体からの要請を受けて、無料で漢字の出張講座「漢字おもしろ出前塾」を開催しています。受講者は小学生から高齢者までさまざま。今回はその様子を取材しました。

九月十五日、札幌市手稲区のコミュニティセンターにおいて地元のシルバー大学の同期会の招きで、北海道漢字同好会による出前塾が開催され、七十代～八十代の男女三十名ほどが参加しました。

まずは、間違われやすい漢字やことばのクイズからスタート。普段正しいと思い込んで使っていた言葉が、意外にも不正解・・・とわかり、参加者からはどよめきが。本日の司会を務める菅原えりなさんが、漢字の字源・字義をもとに解説をすると、「なるほど～」と感嘆の声が聞かれました。

その後はグループに分かれて六十枚の漢字カードを組み合わせて三十個の二字熟語を作るゲームに取り組みました。グループで真剣に考えたり、ちょっと笑えるような熟語を作ってみたりして大盛り上がり。

参加者には、「漢字の講座と聞いて、難しいだろうと気がひけていましたが、こんなに楽しめるものとは思いませんでした。」（女性）「意外に知らないことも多くて、いろんなことを学べた。もっと勉強したい。」（男性）などと好評でした。

講座終了後、北海道漢字同好会のみなさんにお話をうかがいました。

Q1. 出前塾を始めたきっかけは？

元々は、札幌に来られない同好会員のために札幌以外の場所で、漢字を通じた集まりを開催したのが「出前」の始まりです。

平成十三年頃から「おもしろくてためになる漢字塾」を一般向けに開催。十七年の総会で「より多くの方々に漢字のたのしさ、おもしろさを知っていただくために地域・職場・学校等に漢字あそびの『出前』をすること」を正式に決めました。今年度からは会則にも明文化し、より「出前」活動に力を入れています。

Q2. どんなところへ出前しているのですか？

小学校の保護者サークルや、学童施設、高齢者サークルや福祉施設などへの出前が多いです。最近は口コミでの広がりもあり、依頼が増えています。

Q3. 漢字を教えるのは難しそうですが・・・。

私たちは、漢字の教師ではありません。「漢字を学ぶ楽しさを知っている、いわゆる漢字愛好家」です。難しい知識より、漢字の魅力をわかりやすくお伝えすることが一番の目的です。パズルやクイズ形式で誰にでも参加しやすい内容を心がけています。会員がサービスでマジックやハーモニカ演奏を披露することもあるんですよ。

Q4. 出前塾を行うことで新たな発見はありましたか？

一般の方にわかりやすく説明するには、自分もしっかり理解しておかなければなりません。準備中に辞書を引いていて新たな知識を得ることもあります。最大の気づきは、「自分自身が誰よりも漢字を楽しむことが大切だ」ということかもしれません。

Q5. これからの目標はありますか？

これまでに会員の半数近くが出前塾を担当または協力していますが、できれば全員が経験できるようにしていきたいです。

すべての会員が漢字に興味があるといっても、「字義」に関心がある人、「漢字の歴史」への造詣が深い人、「漢文・漢詩」が好きな人などさまざま。各々の得意な分野の知識を生かしながら、出前塾の幅も広げていけたら良いと考えています。

日本語を読み書きする私たちにとって、漢字は身近で不可欠なものです。今回の特集の投稿や取材を通して、漢字の知識を深めておくことは、教養の幅を広げることであり、ひいてはコミュニケーションの幅を広げることにつながると改めて感じました。特に最近は、漢字・日本語への関心が高まっています。漢検を通じて、漢字・日本語に関する知識を深めてこられた皆様には、その知識を日常生活の中で大いに活用してほしいと思います。

（ネットワーク担当）

「漢字教育サポーター育成講座」第1期受講者を募集します！

皆さんの漢字の知識をさらに深めてみませんか？漢字の知識や面白さを伝えてみませんか？

財団法人日本漢字能力検定協会では、地域での漢字教育の深化、発展を目指すため、漢検生涯学習ネットワーク会員の中から「漢字教育サポーター」を育成する事業を始めることにしました。「漢字教育サポーター」の皆様には、学校や公共団体より寄せられた漢字指導の依頼へのご協力をお願いしたいと考えております。

サポーターの育成にあたり、立命館大学および立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所の協力を得て、立命館大学の定める「漢字教育士」資格認定講座と同等の講座を開講します。

漢検受検で培った漢字の知識をさらに深め、地域にその力を還元したいと考える意欲的な会員を広く募集します。詳しくは同封の「漢検生涯学習ネットワーク　漢字教育サポーター育成講座　第1期受講者募集要項」をご覧ください。

漢字同好会からのお知らせ

全国の漢字同好会にて秋冬にかけて行われるイベントをご紹介します。

北海道漢字同好会

特別講演会

- 日時●平成23年12月3日(土)16時～17時30分(受付15時30分～)
- 会場●かでる2・7　710号室(札幌市中央区北2条西7丁目)
- テーマ●「漢字音符字典」の開発～埋もれていた漢字のつながり発見～
- 講師●漢検生涯学習ネットワーク会員 山本康高氏(京都在住)
- 聴講料●ひとり500円(当日徴収)
- 申込方法●事前の申し込みは必要ありません。直接会場にお越しください。
- 問い合わせ●札幌市手稲区前田4条12丁目3-23　菅原方 北海道漢字同好会 TEL/FAX　011-691-5123 Eメール　kanji0764@nifty.com

石川漢字友の会

11月例会

- 日時●平成23年11月27日(日)13時30分～15時
- 講演●『大野木克寛日記』にみる加賀上級藩士の生活―武士の生活のウラ・オモテ―
- 講師●高木喜美子氏(古文書研究家)
- 申込締切日●平成23年11月15日(火)
- 会場●北國新聞会館10階108教室(金沢市南町2-1　北國新聞文化センター内)
- 参加費●聴講無料
- 申し込み●ハガキ、FaxまたはEメールに、氏名、住所、電話番号を明記の上お送りください。
- 宛先●石川漢字友の会　事務局長　宮前外彌旺 〒921-8036　金沢市弥生2-13-6 Fax 076-260-3427 (北國新聞文化センター気付) Eメール　miyamae.tomio@opal.plala.or.jp

※12月例会(12/18研修会報告)・1月例会(1/22漢検受検向け学習会)も予定。詳しくは事務局までお問い合わせください。TEL 076-241-7617

会員お薦めの書籍

天才ゆずぽん。

株式会社メディアファクトリー　2007年　こゆず著

紹介者　福岡県　おばせ勝義さん

最年少の小4で漢検1級に合格した西村柚之介君のコミックエッセイ。なんとも楽しいタッチのマンガに引き込まれ、一気に読んだ。彼の母である著者は「あとがき」で、「天才ではない」と明言している。何度も文字をなぞり、確実に判るまで調べ、書くことを繰り返す。一つのものを獲得するための手筈を、楽しみながらきっちりやる姿が「天才」的なのだ。教育を研究してきた私だが、誰でも「天才」になれることを、彼から確り学んだ。また、現在web連載中の「漢字ゆずぽん。」(「BrushUp 学び」内コーナー http://www.brush-up.jp/ad/weekly_bu/)では、柚之介君の1級の勉強法や漢字とふれあう愉快な日常を紹介。心和むイラストとユニークな切り口で、漢字を学ぶ楽しさを伝えている。

※右記の書籍の購入は、お近くの書店もしくはインターネットで。

漢字教育士養成について

加地伸行

立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所 所長

学力を高めるには、どうすればよいか。

この古くて新しい問題について、さまざまな解決方法が生まれては消え、消えては生まれてきており、一般論としては正解などない、というのが現実である。

しかし、だれの学力を指すのか、それによっては正解がある。

その〈だれ〉を小学生としてみよう。すると、学力増進の道筋がはっきりと見えてくるのである。

小学生の場合、学力を高めるには、第一条件がある。それは、受講態度だ。

世間では、知力が学力を上げる力と思っている人が多いが、そうではない。受講態度すなわち先生の顔をしっかりと見て聴く態度、これが学力をつけるのである。

教室をうろうろと歩く、隣席の子にいたずらをする、窓の外ばかり見ている……といった受講態度では、学力が高まることなど絶対にない。

受講態度が良い—これは実はモラルの問題である。今日、モラルを身につけるということ、こうした〈人間としての基本〉が家庭において教育されていないことが、学力をつけられない根本原因である。親は子どもの学力をつけたければ、家庭においてしっかりと道徳教育をすることである。

さて、それができたとしてその次に、小学生の学力を増進する方法は何か。

その答えは決まっている。国語力を高めること、これに尽きる。

小学校の教科に理科・社会は実は不要である。まして英語など学習する必要はない。学習するのは、国語・算数・体育・家庭で十分である。国語力があれば、理科や社会のことなど読めばすぐわかる。算数も国語力がなければ、本当に理解することはできない。

だから、時間割で言えば、国語は一日に四時間平均ぐらい学習するのが理想である。すると、週に二十時間。今のような週五、六時間とは決定的に異なる。

その国語学習において、いくつかの柱があるが、その一本が〈漢字〉であることは言うまでもない。しかし、残念ながら、我国の国語教員の大半は〈漢字教育〉に自信がない。だからただやたらと「覚えろ、覚えろ」と言うだけの精神論に陥ってしまっている。

なぜか。理由ははっきりしている。小学校教員免許や中学校・高等学校教員免許（国語）の取得において、学生は漢字についてのきちんとした教育を受けたことがないからである。すなわち、現在の教員免許（国語関連）には、明確な〈漢字教育〉履修規定がないので、結局、大学側は開講しない。大学というところは、強制がないと開講しない。その結果、漢字ならびに漢字教育についてほとんど無知なまま教壇に立った教員は、やたらと「覚えろ、覚えろ」と言う以外に漢字を教えることができないでいるのだ。

そこで、私の属する立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所は、漢字教育ができる人材を養成するために講座を準備し、その修了者に対して「漢字教育士」の資格認定を行うことにしたのである。もちろん特許庁に商標登録の許可を得ており、我国において唯一の資格認定である。

では、この漢字教育士号を取得して何をするのか。

われわれ研究所の最終目的は、全小学校教諭、ならびに全国国語担当教員（中学・高校）が取得し、正常な漢字教育を行うことにある。

その道は遠い。しかし、今年から福井県は県の予算を立て、教育委員会・教育庁主催によって、現役教員を対象とする漢字教育士資格認定講座の研修を始めた。もちろん当研究所が全面的に協力している。八月に行われた講座の受講者は四十三名。目下、福井県に続いて某自治体と交渉中である。

一方、放送大学教養学部大阪学習センターにおいても昨年度から開講されており、一単位（二十二・五時間）ごとの九十名定員がどれも常に満員であり、登録できない希望者が溢れている。放送大学の大阪における受講者は、現職教員が約十六パーセントで、その他は多種多様である。これは、年齢や職業にかかわりがないことを明確に物語っている。

もちろん、立命館大学文学部においても今年から開講しているが、その対象は学内の学生に限られている。

さて、漢字と言えば、漢検ではないか。

昨年、私は漢検の上位級合格者の所属する*日本語教育研究所の研修会において講演をし、懇親会にも出席した。どの方も漢字に対する愛情と熱情と詩情を持っておられた。感銘を受けた。

それなら、そのお気持ちのまま、後輩、わけても幼少の子たちに、あるいは中高の受検生に対して、漢字を教えられてはいかがか。

漢検の二級・準一級合格者は、語彙について十分な知識を持っている。ならば、その上に〈漢字そのものに関する組織的体系的理解〉をし、漢字教育の実践的方法の研修を受けられるならば、鬼に金棒ではないか。

小中学生のための塾において「漢字」の授業があっていい。心ある経営者ならば、その申し出に応えるのではなかろうか。われわれ関係者は、全国組織のいくつかの塾連盟に要望しアピールする予定である。あるいは、サークル活動の一つに「漢字教室」があっていい。マンションの集会所あるいは自宅で教室を開くことも可能ではなかろうか。英語教室があるくらいなら漢字教室があっていいし、小中学校等で漢字学習支援ボランティアとして活躍されてもいい。

このたび、漢検と当研究所とが協力し、大学や公共団体以外の民間において、はじめて漢字教育士資格講座を開くことになった。これまでの受講者において、漢検の受講者が最もレベルが高いと思う。大いに期待している。ぜひ受講されたい。

なお、この養成講座の第一期受講者の中で、漢字教育士号を取得された方に対して、当研究所編の『白川静の世界』全三巻（定価計五〇四〇円・平凡社・二〇一〇年刊）を記念に贈呈いたしたい。

＊漢検生涯学習ネットワークの前身組織。

お知らせ

会員通信への投稿募集中！

会員通信を充実させるため、会員の皆様に会員通信への積極的な投稿をお願いしております。つきましては、**当初3月に予定していた、会員からの投稿による「会報誌」の作成を取りやめ、会員通信を増刊して皆様からの投稿を掲載していきたいと考えております。**何卒ご理解を賜りますようお願いします。

●第4号特集企画（2月頃発行予定）

「平成23年（2011年）私の漢字研究」

漢検合格後もさまざまな角度から漢字について研究されている会員の皆様、研究成果をまとめて発表しませんか？

テーマは漢字に関する研究であれば結構です。研究報告ですので、仮説、調査結果、考察を簡潔に述べてください。また、辞典や文献の引用が大部分を占めるような投稿や、感想文・エッセイはご遠慮ください。

字数●1600字以内（タイトルを含む）

●常時募集

1級に初めて合格しました！

難関の1級に初めて合格した方の喜びの声と、合格のポイントを紹介します。以下の項目に沿って原稿をお書きください。

項目●①いつ合格したか
②何回目の挑戦での合格だったか
③合格に向けて工夫したこと（勉強方法等）、励みになったこと
④合格したときの気持ち・感想
⑤今後の目標

対象●平成22年度第2回（10月）～平成23年度第2回（10月）の検定で初めて1級に合格された方

字数●項目①～⑤までで500字以内

漢字・日本語に関するお薦めの書籍紹介

書名、著者名、出版社名、発行年を明記し、お薦めの理由を250字以内にまとめてお送りください。

漢字に関するパズル・クイズ

子どもからお年寄りまで楽しめる面白い漢字パズルを募集します。問題と解答を必ず セットで投稿してください。

例●漢字クロスワードパズル、こども向け漢字クイズ（学習漢字のみ使用）難読漢字パズル等

投稿方法

原稿とともに会員番号、氏名（ペンネームで掲載希望の場合はペンネームも添えること）、電話番号を必ず明記し、郵便・FAX・Eメールでお送りください。

※Eメールの場合は原稿書式を「Microsoft Word」もしくは「一太郎」とし、添付ファイルでお送りください。

締切日

2011年12月16日（金）（協会必着）

投稿先

郵送　〒600-8585
京都市下京区烏丸通松原下る五条烏丸町398
財団法人日本漢字能力検定協会
漢検生涯学習ネットワーク担当

FAX　075-352-8311　Eメール　lifelong@kanken.or.jp

すべての投稿を掲載できるわけではございません。
原稿はこちらで一部編集・校正することがあります。ご了承ください。

メールマガジンに登録しませんか？

この会員通信は会員の皆様に年3、4回定期的にお送りしておりますが、漢検生涯学習ネットワークではこのほかに1、2ヶ月に1回程度のメールマガジンも発行しています。

メールマガジンでは、漢検の最新情報や漢検協会がおこなうイベント情報などをいち早くお届けすることができます。メールマガジンの購読をご希望の方は、以下の事項をメール本文に記入し、送信先へEメールしてください。

メールマガジンの購読は、PCアドレスをお持ちの方に限ります。

●記入事項　会員番号・氏名・電話番号・Eメールアドレス（PCアドレスのみ）

●送信先　lifelong@kanken.or.jp